

レイトン・ハウス
階段奥の青いタイル
はウィリアム・ド・モ
ーガン作。左側はシ
リアタイルとイズニッ
クタイル。(イギリス、
ロンドン 19世紀末)



梶屋友子
(ますや ともこ)

イスラーム美術史学者。
東京大学東洋文化研究
所教授。東大大学院人
文学部研究科美術史修
士課程修了。ニューヨ
ーク大学大学院美術史
Ph.D.取得。1999年より
現所属。

©Michael Jennr / Alamy



上：イズニクタイル
(INAXライブミュージアム所蔵)
下・左：アルハンブラ宮殿
(スペイン、グラナダ)



に発展していききました。植物文もフリーハンドで描くわけではなく、幾何学的な作図があって配置されています。いずれも、永遠に続けることができるという点で発展していったと言えるでしょう。

—幾何学文は世界各国にあります。「永遠に続く」というのがイスラームの特徴なのです。
梶屋 個々の図形が単に集められているだけではなくて、同じ、あるいは多様な図形が縦、横、斜め、放射線状に組み合わされて一定のパターンを形成して、無限に続く。数学で計算された無限の美は、神が創造した完璧な世界を暗示しています。

イスラーム建築には 先人の知恵が詰まっている

—そこに色のあるタイルを使うことで、変化に富んだ無限のパターンが描けるわけですね。色としてはブルーが有名ですが。

梶屋 青が多くて、それは中東に少ない水を象徴するからだと言う人がいます。けれど私は、青がいちばん出しやすい色だったのだろうと思っています。

—技法的に、ですか？

梶屋 はい。最初は青でしたが、緑、黄と、どんな色数が増えていったって、最終段階ではピンクまで多色が使われています。そういうのを見ると、青に特別な意味があるというより、本当はもっとカラフルにしたかったけれど、製造できる色から増やしていったという感じを受けています。本当なら赤を入れたいところなんでしょうが…。

—技法的にできないということですね。そうすると、トルコの「イズニクタイル」の赤は、すごい技術だったのですか。

梶屋 あの赤ができて、トルコの人はすごく喜んだと思います。

—でき上がった時の壁面の様子は、制作にかかわる人たちの間で共有できていたのでしょうか。

梶屋 そうだと思います。権力の象徴でもある一大ブ

ロジェクトです。過去の人がつくった以上のものをつくりたいという王様もいたでしょう。一つの建物で使ったデザインは次の建物では使わない、同じ建物でも、ある箇所の模様を別の箇所では繰り返さないといった様子も見られます。

—それだけ、いろいろなパターンがデザインできる。画家のマウリッツ・エッシャーはアルハンブラ宮殿に何週間も通って、タイルの作品をつくったといっています。イスラーム建築には先人の知恵が詰まっているということでしょう。

市民の暮らしの中に 浸透していくタイル

—そうしたイスラームの影響をいろいろな地域が受けています。梶屋 スペインは、アルハンブラ宮殿で使われていたタイルの形式を使いつつ、「クエンカタイル」という独自のタイルを生み出しました。ちよつと見ると、ゼツリージュかなと思うけれど、そうではなくて、一枚の四角いタイルに凹凸を付けて色が混ざらないようにして焼いている。デザイン的には、それ以前のイスラームのものを真似しているのが多いです。

—イギリスでは1800年代にたくさんのタイルがつくられますが、当然のようにイスラームの影響は見られます。純粋な幾何学模様というより、花や植物の模様をプラスした形です。

梶屋 オリエンタリズムという感じで、エキゾチックなイスラーム風の建物を建てるのはイギリスはじめ各国で行われています。19世紀末には、ウィリアム・ド・モーガンがイスラーム風のデザインをしていますね。

—ヨーロッパでは壁紙の代わりにタイルを使って、壁面を装飾するようになります。耐水・耐火といった機能を活かして、幅木として使われたり、暖炉の回りに使われたりして、市民の暮らしの中に浸透していきます。

梶屋 イスラームでは、耐水機能はあまり重視されていなかったようですね(笑)。

—たくさん集まることで生み出されるタイルの魅力―連続する模様、リズムミカルな表情、その豊かな装飾性に、もっと注目していきたいと思っています。

(2016年2月15日収録)

一枚の奥ゆき、幾千の煌めき

一枚一枚が深い表情を持つタイルは、幾枚も連なることで、装飾性を増していきます。そこに生まれるリズム、広がり、意外性……。タイルが見せる、もう一つの表情をのぞいてみませんか。

2015 12/26(土)~2016 1/6(水)にBunkamura Galleryで行われた企画展「Tiles 一枚の奥ゆき、幾千の煌めき」(企画 株式会社LIXIL)の展示から。(p.13に関連記事掲載)

※撮影/梶原敏英

Dot

一片一色、幾千で描く

紀元前3500年頃、メソポタミアの古代都市ウルクにつくられた神殿の壁は、クレイベグ(粘土釘)と呼ばれる円錐形のやきもので装飾されています。その数は百万本以上。白・赤・黒の3色で着色したクレイベグを規則正しく積み上げることで、ジグザグやひし形などの模様を描きだされています。それは、人類が初めて建築の壁面を飾った5500年前のグラフィックパターン。そして、ドットは点描という形で現代に受け継がれています。



モザイクタイル画 東郷青児の『裸婦』



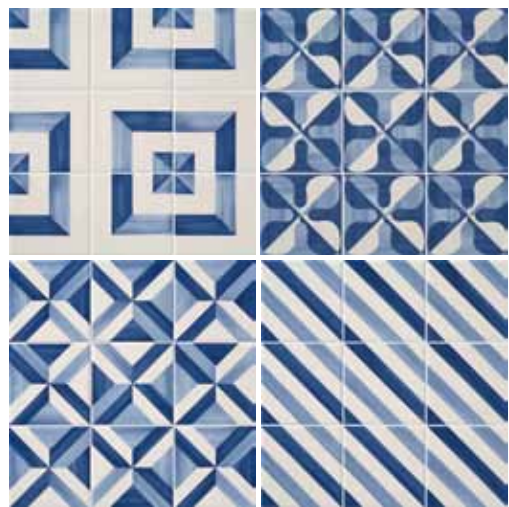
一辺10.5mmの正方形タイル20色、全13,600枚を駆使して描かれたモザイク画。使用タイルは1947年に発売された全77色の「イナ・アートモザイクタイル」。東郷青児をはじめ岡本太郎、高井貞二らの原画を忠実に再現したパブリックアートが、さまざまな公共空間を飾ってきました。



Metamorphose

面から空間へ、タイルの可能性

だまし絵で有名なエッシャーは、アルハンブラ宮殿のイスラーム装飾に魅せられて、デザインを発想したといわれます。イタリアマダンデザインの家、ジオ・ボンティは、自らデザインしたタイルを効果的に使い、多彩で豊かなインテリアを創出してきました。タイルに注目したアーティストたちは、時に制約となるタイルの特性を軽々と越えてタイルの可能性を広げました。床が立体的に浮き上がって見えたり、整然と並ぶパターンの一部を回転させて、全く新しいリズムを奏でたり、楽しい絵柄を目で追っていると、カゲが飛び出してきたり。多くのクリエイターが、タイルの新たな表現に挑戦してきました。



ジオ・ボンティのタイル

南イタリア、ソレントのホテル・パルコ・ディ・プリンチピのためにデザインされたタイル。配列を変えていくことで表情がさまざまに変化します。

Motif 文様の意図

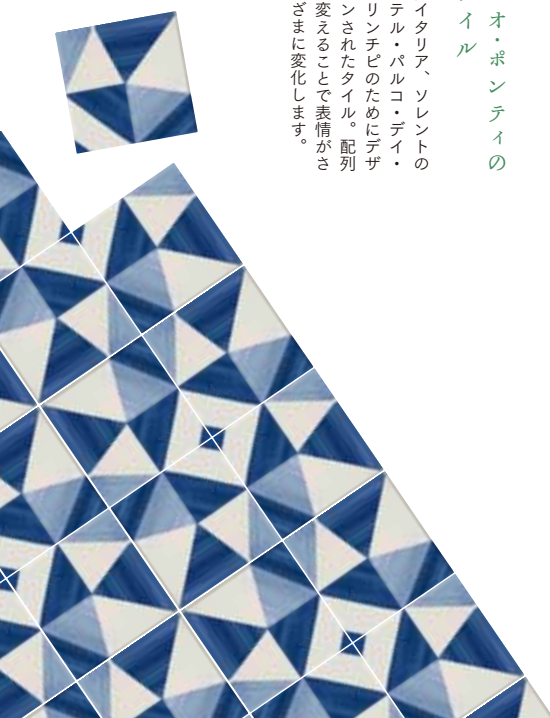
タイルは床や壁を覆う装飾材として発展を続け、欧州をはじめ世界の各地域で、その時代の様式を反映しながら、多種多様にデザインされてきました。動物や花、一枚でも美しいモチーフが、数枚、数十枚と並ぶとどうなるか。連続性や反復の面白さ。規則性もたらす安定感、組み合わせられて初めて気づく驚きがあります。四隅にあしらわれた小さな文様が整列してアイコンとなり、単独の絵柄がシリーズとしてつながっていく楽しさも味わえます。



1 イギリスの象嵌タイル 何枚もつながると模様が見え方もちがってくる。
2 ド・モーガン 多彩草花文手書きタイル 庭に咲いた草花のように広がっていく。



オランダの17世紀以降のオランダのタイルは、生活や風物を題材に多彩な絵柄が描かれています。それらは一見独立していますが、何枚か組み合わせることで、大きなひとつの全体を構成してきます。そこにリズムカルな連続性と一貫性を与えるのが、四隅に描かれたモチーフ(縁飾り)、草花や牛の頭、蜘蛛の頭、雷文(雷くずし)などを図案化したもので、タイルがつけられた時期を判断する手がかりにもなっています。



エッシャーのタイル
2008年~2009年に株式会社ハウステンボスのサプライセンス契約のもと、エッシャーの作品を再現したものです。「正則分割」や「メタモルフォーゼ」などの法則が表現されています。



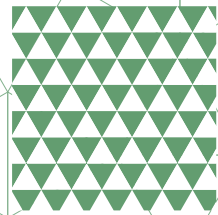
レオナルド・ダ・ヴィンチがデザインした六角形のタイル

幾何学 整合するかたち、緻密な連鎖

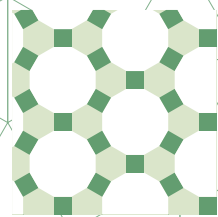
三角や方形、ひし形や円、線や面で構成された幾何学模様は、合理的で美しい図柄をつくります。偶像崇拜をタブーとするイスラームの宗教建築では、幾何学模様には鮮やかな色を添えて並べ、壁や天井を装飾しました。さらにタイル形状そのものを、正三角や六角形、あるいは星形と十字形の組み合わせにして配置することで、壁や床全体で幾何学模様を描く例もあります。



カットワーク
モザイクタイル
の再現
イスラーム建築の華とも呼ばれるカットワークモザイクタイルの建築装飾は、平板のタイルをいくつもの幾何学形状の小片に加工し、組み合わせでつくられています。現代でも、イランやモロッコでは伝統的手法として制作が続けられています。



ピタゴラスの平面充填形
(正三角形)
平面内をいろいろな形をしたタイルで隙間なく埋め尽くす操作を「平面充填」と呼ぶ。ピタゴラスは、一種類だけで平面を埋め尽くせる正多角形は、正三角形、正方形、正六角形の3種類だけと証明した。



ラスター彩星形タイル
と青釉十字形タイル
イラン/13~14世紀

アルキメデスの平面充填形
(正方形と正十二角形)
ピタゴラスの証明から約300年後、アルキメデスは、2種類以上の正多角形のみでできる平面充填形は8種類と証明した。



白石 普
(しらいし あまね)

1970年、東京都出身。タイル職人。陶芸家。芸術一家に生まれ育ち幼少より美術、芸術に親しむ。20歳のときに1年間イタリア・ギリシャ各地を歴遊、ローマ遺跡やビザンチン建築に興味を持ちタイル職人となる。のちイスラームの幾何学モザイク工房で2年間修行、モスク建設などに携わる。2003年白石普タイルワークス設立。施工はもちろんデザインからタイル制作まで行う異能のタイル職人としてタイル業界にその名を轟かせている。



- 1 制作中の白石さん
- 2 焼き上がったオリジナルタイルを並べる。この後、紙貼りをして現場に持ち込む。
- 3 白石さんが施工したモロッコ風の中庭。1万個を超える手づくりピースからなる。
- 4 生命の海をイメージさせる幾何学モザイクタイル。
- 5 オランダの画家、エッシャーの鳥と魚を組み合わせたデザインタイル。



サハラ砂漠で見上げた星空が、ゼッリージュの幾何学模様にな重ったとき、白石さんの心に深く刻まれた感覚だ。今も現場で、模様が敷き詰められていく過程には、わくわくする。「四角いタイルを張っている時には、あまり感じられないんですが、形あるものを張っていると、ほんと、宇宙をつくっているような気になってくる。広げようと思えばどこまでも広げられる。すごいんです幾何学って」。手間をかけるほど価値があるという、ゆるぎない信念のもとゼッリージュをつくり続けるモロッコの人々。その思いを共有しながら、日本の気候風土に合ったゼッリージュをつくりたいと考えている。



「ゼッリージュは無限の宇宙」と言う白石さん。それは、かつてある平面を一種類で連続して埋め尽くせる正多角形は、正三角形、正方形、正六角形の3種類。これは古代ギリシャの数学者ピタゴラスにより証明された。紀元前500年頃の話だ。その300年後、アルキメデスが、2種類の正多角形を使って埋め尽くす組み合わせを8種類発見した。「8種類しかないんですよ」。その8種類のパターンを分割したり、くっつけたりしながら、平面を埋め尽くすのがゼッリージュの幾何学模様。各工房には得意な幾何学模様があり、親方が一子相伝で図柄を守っている。

「ゼッリージュは無限の宇宙」と言う白石さん。それは、かつてある平面を一種類で連続して埋め尽くせる正多角形は、正三角形、正方形、正六角形の3種類。これは古代ギリシャの数学者ピタゴラスにより証明された。紀元前500年頃の話だ。その300年後、アルキメデスが、2種類の正多角形を使って埋め尽くす組み合わせを8種類発見した。「8種類しかないんですよ」。その8種類のパターンを分割したり、くっつけたりしながら、平面を埋め尽くすのがゼッリージュの幾何学模様。各工房には得意な幾何学模様があり、親方が一子相伝で図柄を守っている。

タイル職人を魅了したモロッコ、ゼッリージュの幾何学模様

オリジナルのタイルデザインから施工までを手掛けるタイル職人、白石普さん。若き白石さんを虜にしたのがモロッコのタイルモザイク・ゼッリージュだった。2年間に現地で過ごし、専門学校や工房の親方のもとで、魅惑的な幾何学模様と色彩が作り出すゼッリージュを学んだ。「直線と円の組み合わせで現れる作図は面白くて、暇さえあれば描いてました」。

今、白石さんの手元に大切に残された1冊のノートがある。「僕が工房で勉強していたモロッコの伝統的な幾何学模様です。いろいろな模様に見えるけど、元は2種類の正多角形の組み合わせ。それを発展させたのがモロッコのタイルモザイク、ゼッリージュなんです」。